



AAI News

人と農と環境をつなぐ技術を考える

パキスタンとの縁「国際協力の世界への出発地」

今年の2月から国際耕種に入社して、翌月の3月からは技術協力プロジェクトの一員としてパキスタンの首都イスラマバードへ渡航している。パキスタンは、私にとって国際協力の世界へのキッカケを作ってくれた場所である。国際耕種の社員としても、開発コンサルタントとしても半人前以下の私ではあるが、思いばかりはこの国の人々に何か恩返しができたらと思っている。今回は初めてのAAI News執筆であり、初業務がパキスタンということで、私の自己紹介を学生時代のパキスタン旅行から遡って簡単にここに書いていきたいと思う。

約10年前、私が大学生の頃、中国からカラコルムハイウェイ経由でパキスタン北部に入国して、そこから南部のカラチまでを約1ヵ月間旅行した。当時のパキスタンは、アフガニスタンへの交通の要衝であるカイバル峠周辺で、紛争用物資を狙った爆発事件やカラチ周辺でのテロなど、治安上不安定な時期でもあった。しかし見た目にも典型的な貧乏旅行をしていたせい、か、たくさんの方々から食事をご馳走して頂いたり、困った時にサポートして頂いたりもした。また、ラマダーン期間中であつたので、日中飲食店が営業していなく街が閑散としていたり、街中で行われている断食明けの食事に参加したりと、ラマダーン独特の雰囲気を感じることができた。



ラマダーン明けの食事の様子



かつて世界最大のモスクであつた、バードシャヒーモスク

一部の地域では治安面において不安定で危険なこともあったが、この旅行を通して、現地の方々との出会いや彼らの日常生活からイスラーム文化圏や社会の独自性に強く興味を持つキッカケになり、将来はそれら地域で活躍したいと思うようになった。その為には専門的にできることを増やさないといけないと考えるようになり、そこから開発経済、農村開発、アラビア語を学び始めた。

大学卒業後はイスラーム文化圏へ行ける可能性があるかと期待して、商社に就職したが、商流の川中や川下の流通業務が中心で、元々現地に寄り添った仕事をしたかった私にとって違和感があった。新たな挑戦をしたいと感じ始め、青年海外協力隊コミュニティ開発隊員としてスーダン国へ赴任し、農村地域で食品加工などの生計向上活動に取り組んだ。任期満了後は協力隊時に感じた力不足を補う為に英国で農村開発学を学んだ。そして、どうにか国際協力の世界で新たな一步を踏み出す機会を頂くことができた。

農業経済、農村の生計向上や社会分析を主な専門分野としている私は、国際耕種の中では異色ではあるが、農業及び自然環境分野を主な業務としている国際耕種の一員になることで、より現場の状況やニーズを汲み取ることができ、それに応じた技術協力を追求できる強みになれたらと考えている。ここまでの道筋の出発地がパキスタンであったこと、国際耕種での初業務がパキスタンであるということは、勝手ながら不思議な縁を感じるとともに、今回は私にとってどのような出発地になるのか。初めての業務で緊張や不安もあるが、とても楽しみでもある。

(2019年7月中村)